



図 ケルン市立図書館で配布するバッグとノート

を、用意された実物を手に取りながら学習する（実際、子どもたちはこういった言葉も知らないことがしばしばある）。そしてその後にはじめて、それらの言葉が重要な役割を果たす絵本の読み聞かせを行う。いずれも背景には、単に聞くこと、あるいはそらんじることと「読解する」ということとのギャップに気づかされた「PISA ショック」の反省がある。子どもたち一人ひとりの読解力までにかかわろうとする、踏み込んだ取り組みである。

（総務部人事課：伊藤<sup>いとう</sup> ましろ<sup>ましろ</sup> 白）

- (1) 2000年の第1回調査では総合読解力において、ドイツは31か国中21位（日本は8位）であった。なお2006年の第3回調査では56か国中18位（日本は15位）。OECD Programme for International Student Assessment (PISA). [http://www.pisa.oecd.org/pages/0,2987,en\\_32252351\\_32235731\\_1\\_1\\_1\\_1\\_1.00.html](http://www.pisa.oecd.org/pages/0,2987,en_32252351_32235731_1_1_1_1_1.00.html), (accessed 2010-02-18). “OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) 《2000年調査国際結果の要約》”. 文部科学省. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/001/index28.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index28.htm), (参照 2010-02-18). “OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA): 2006年調査国際結果の要約”. 文部科学省. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/071205/001.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/071205/001.pdf), (参照 2010-02-18).
- (2) “Förderung von Lesekompetenz. Expertise”. Bundesministerium für Bildung und Forschung. [http://www.bmbf.de/pub/bildungsreform\\_band\\_siebzehn.pdf](http://www.bmbf.de/pub/bildungsreform_band_siebzehn.pdf), (accessed 2010-02-18).
- (3) Stiftung Lesen. <http://www.stiftunglesen.de/default.aspx>, (accessed 2010-02-18).
- (4) 川西美沙. 子どもの本の現場より: 「ドイツ読書基金」(Stiftung Lesen) について. JBBY. (102), 2009, p. 77-79.
- (5) TOMMI. <http://www.kindersoftwarepreis.de/>, (accessed 2010-02-18).
- (6) 360-Grad-Leser. <http://www.youtube.com/360gradleser>, (accessed 2010-02-18).
- (7) Auslese. <http://www.stiftunglesen.de/projekte/auslese/default.aspx>, (accessed 2010-02-18).
- (8) Deutscher Jugendliteraturpreis. <http://www.djlp.jugendliteratur.org/>, (accessed 2010-02-18).
- (9) Lesen in Deutschland. <http://www.lesen-in-deutschland.de/html/index.php>, (accessed 2010-02-18).
- (10) ガンツェンミュラー文子. 特集, 21世紀子どもの読書活動推進のために: ドイツの読書推進活動. JBBY. 2002, (95), p. 18-20.

## CA1707

### 英国の読書推進活動 — 一国民読書年を中心に —

英国では、ブックスタート事業（E480 参照）をいち早く始めたほか、読書推進事業を担う団体・組織が数多く存在するなど、読書推進活動が比較的活発に行われている（CA1498 参照）。本稿では、最も有名な活動の一つでもある「国民読書年」（National Year of Reading; 以下「NYR」とする）を中心に紹介する。

#### 1. 第 1 回国民読書年

英国では、1998年9月から1999年8月にかけて、第1回のNYRが実施された。NYRが計画された背景には、読書離れによって当時の英国内の初等・中等教育を受ける児童・生徒のリテラシーが低下していることへの危惧があったとされている（CA1241 参照）。1997年、当時の教育雇用大臣であったブランケット（David Blunkett）氏の発案により、子どもたちのリテラシーの向上と成人の生涯学習支援のために、読書推進活動を全国規模で行うNYRを翌1998年に実施することが決まった。

教育雇用省<sup>(1)</sup>から委託を受けた英国リテラシー・トラスト（National Literacy Trust）が中心となって結成されたプロジェクトチームは、NYRの開始前には、教育、図書館、スポーツ、ボランティア団体などさまざまな関係機関に働きかけて周知活動を行い、期間中は、ニュースレターやウェブサイトなどを使った情報提供の面において、各地の図書館、学校、コミュニティなどのイベントやキャンペーンをサポートするという役割を担った（CA1354 参照）。また、それらの活動に対する資金的なサポートも行っており、その総額は80万ポンド（当時のレートで換算して1億5,000万円ほど）にも上ったという<sup>(2)</sup>。

#### 2. 第 2 回国民読書年

第2回のNYRは、第1回NYRから10年が経過した、2008年に実施された。その背景には、依然として、読書に対する意識の低さがあった<sup>(3)</sup>。2006年に行われた読書に関する国際調査PIRLSの結果によると、学校以外で楽しみとしてほぼ毎日読書をするイングランドの子どもの割合は33%と、他の国と比較してかなり低かった。また2001年の調査結果と比較して、その割合には増加が見られなかった<sup>(4)</sup>。第2回NYRの活動報告書『読書：その未来』（Reading: The Future; E915 参照）によれば、第2回NYRの目的として、家庭やその他の場所での読書を推進す

ること、および第1回NYRでも示されていた、人々の読書に対する意識を変えて、英国を「読む人の国」(nation of readers)にすることが掲げられた<sup>(5)</sup>。

第2回NYRでは、児童・学校・家庭省から委託を受けた英国リテラシー・トラストと読書協会(The Reading Agency; E017参照)が、ブックトラスト(Booktrust)や初等教育リテラシーセンター(Centre for Literacy in Primary Education)といった読書推進事業を担う諸機関の協力を得て活動を取り仕切った<sup>(6)</sup>。

2008年1月から3月までの最初の3か月は各機関・団体に対して参加を呼びかける期間とされ、4月からは月ごとに設定されたテーマを基に、各機関・団体によるイベント、キャンペーンなどが実施され、NYR公式サイトに登録されたイベントの数はおよそ6,000にも上った。各種イベントの情報や関連記事はNYR公式サイトだけでなく、各機関・団体がイベントの情報を投稿できるサイト“WikiREADia”<sup>(7)</sup>でも提供された。“WikiREADia”は、NYR以外の情報も掲載した読書支援サイトとして機能しており、このサイトの開設が第2回NYRの大きな成果の一つであるとの評価も与えられている。

### 3. 図書館の活動

第2回NYRでは、新規利用者を増やすためのキャンペーンが英国全土の図書館で展開された。ラジオの地方局の協力を得たり、ショッピングセンターへ出向くなど様々な方法で呼びかけが行われた。その結果、2008年4月から12月までの間に当初の想定を大幅に超える230万人が新規利用登録を行った<sup>(5)</sup>。

個々の図書館でも様々な活動が行われた。屋外での読書を通して読書の楽しみを知ってもらおうという“Reading Garden”<sup>(8)</sup>や、読書の機会を広げるためにビーチに図書館の分館を臨時に設置するイベント<sup>(9)</sup>といった読書の「場」に着目した活動があった。また、子どもとその家族を対象にしたイベントが多かったことも目に付く<sup>(10)</sup>。子どもたちだけでなく、大人たちと一緒に読書を楽しもうとの考えによるものであろう。

### 4. 国民読書年の効果

NYRは、それ自体は非継続的であるが、継続的な活動のための出発点となるべきものとされている。第1回NYRの1999年から全英規模に拡大したブックスタート事業や、第2回NYRを機に開始した学校図書館協会(School Library Association)による“Book Ahead”<sup>(11)</sup>といった大規模なものから、個別の機関による小規模なものまで、NYRを契機とした継

続的な活動が数多くある。第2回NYRの活動報告書によれば、期間中に組織された団体の97%がNYR以降も継続的に活動する予定とあり、期間中に実施されたプロジェクトの80%が2009年も引き続き行われたという<sup>(5)</sup>。

NYRの影響、効果を測る指標として2つのデータを紹介しておく。1つは、英国の調査会社Taylor Nelson Sofresが第2回NYRの期間中に2度にわたって実施した、読書に対する人々の意識の変化を調べた調査の結果である。その概要は前述の活動報告書の中で紹介されている。それによると、比較的低位の社会階層に属する人々のうち、毎日子どもに本を読むという親の割合はNYR初期の3月には15%であったのがNYR後半の12月には20%に、毎日母親と一緒に本を読むという子どもの割合も17%から32%に増加しており、家庭で楽しみとしての読書をする機会が増している<sup>(5)</sup>。もう1つは、「ナショナル・テスト」での11歳の生徒らの英語(国語)の読み書きの成績である。目標水準に達している生徒の割合は、NYR実施前の1997年が62.5%、第1回NYRの翌年に当たる2000年が75%、第2回NYRの翌年の2009年が80%という結果が出ており、向上が見られる<sup>(12)</sup>。NYRを中心とした読書推進活動の目に見える効果と見ることもできよう。

(関西館図書館協力課：北條 風行<sup>ほうじょう ふうこう</sup>)

- (1) 組織改変により、教育雇用省(Department for Education and Employment)の中の教育部門は、現在、児童・学校・家庭省(Department for Children, Schools and Families)に引き継がれている。
- (2) “National Year of Reading 1998-1999”. National Literacy Trust. <http://www.literacytrust.org.uk/campaign/execsummary.html>, (accessed 2010-02-18).
- (3) “Frequently asked questions about the National Year of Reading”. WikiREADia. [http://www.wikireadia.org.uk/index.php?title=Frequently\\_asked\\_questions\\_about\\_the\\_National\\_Year\\_of\\_Reading](http://www.wikireadia.org.uk/index.php?title=Frequently_asked_questions_about_the_National_Year_of_Reading), (accessed 2010-02-18).
- (4) PIRLS (Progress in International Reading Literacy Study)は2001年に第1回、2006年に第2回の調査が行われている。“Readers and Reading: The National Report for England” National Foundation for Educational Research. <http://www.nfer.ac.uk/nfer/publications/PRN01/PRN01.pdf>, (accessed 2010-02-18). National Foundation for Educational Research. “Progress in International Reading Literacy Study (PIRLS 2006)”. Department for Children, Schools and Families. <http://www.dcsf.gov.uk/research/data/uploadfiles/DCSF-RBX-03-07.pdf>, (accessed 2010-02-18).
- (5) National Literacy Trust, ed. “Reading: The Future”. Reading for Life. [http://www.readingforlife.org.uk/fileadmin/rfl/user/21522\\_NYR\\_Guide\\_AW\\_v3.pdf](http://www.readingforlife.org.uk/fileadmin/rfl/user/21522_NYR_Guide_AW_v3.pdf), (accessed 2010-02-18).
- (6) “2008 National Year of Reading”. WikiREADia. [http://www.wikireadia.org.uk/index.php?title=2008\\_National\\_Year\\_of\\_Reading](http://www.wikireadia.org.uk/index.php?title=2008_National_Year_of_Reading), (accessed 2010-02-18).
- (7) WikiREADia. <http://www.wikireadia.org.uk/>, (accessed 2010-02-18).
- (8) 例えば、以下のものなど。“Reading Garden at Hayle Library”. WikiREADia.

- [http://www.wikiread.org.uk/index.php?title=Reading\\_Garden\\_at\\_Hayle\\_Library](http://www.wikiread.org.uk/index.php?title=Reading_Garden_at_Hayle_Library), (accessed 2010-02-18).  
 “Reading garden - New Ash Green library, Kent”.  
 WikiREADia.  
[http://www.wikiread.org.uk/index.php?title=Reading\\_garden\\_-\\_New\\_Ash\\_Green\\_library%2C\\_Kent](http://www.wikiread.org.uk/index.php?title=Reading_garden_-_New_Ash_Green_library%2C_Kent), (accessed 2010-02-18).
- (9) “Books on the beach - Poole libraries”. WikiREADia.  
[http://www.wikiread.org.uk/index.php?title=Books\\_on\\_the\\_beach\\_-\\_Poole\\_libraries](http://www.wikiread.org.uk/index.php?title=Books_on_the_beach_-_Poole_libraries), (accessed 2010-02-18).
- (10) 例えば、以下のものなど。  
 “Family Reading - a town fun day in Wiltshire”.  
 WikiREADia.  
[http://www.wikiread.org.uk/index.php?title=Family\\_Reading\\_-\\_a\\_town\\_fun\\_day\\_in\\_Wiltshire](http://www.wikiread.org.uk/index.php?title=Family_Reading_-_a_town_fun_day_in_Wiltshire), (accessed 2010-02-18).  
 “Family Reading Groups in Leicestershire”. WikiREADia.  
[http://www.wikiread.org.uk/index.php?title=Family\\_Reading\\_Groups\\_in\\_Leicestershire](http://www.wikiread.org.uk/index.php?title=Family_Reading_Groups_in_Leicestershire), (accessed 2010-02-18).
- (11) 0歳から7歳までの幼い子どもたちに読書の楽しみを広める学校図書館協会の取り組み。  
 “Book Ahead”. School Library Association.  
<http://www.bookahead.org.uk/>, (accessed 2010-02-18).
- (12) 「ナショナル・テスト」(National Test) は、イングランド地域の生徒を対象にした統一学力テストで、1988年から実施されている。7歳、11歳、14歳の生徒を対象としてきたが、14歳の生徒を対象としたテストは2008年を最後に終了している。  
 “School and college achievement and attainment tables”.  
 Department for Children, Schools and Families.  
<http://www.dcsf.gov.uk/performance/tables/>, (accessed 2010-02-18).

## CA1708

### 米国の読書推進活動

#### —Big Read が図書館にもたらすもの—

米国の国立芸術基金 (National Endowment of Arts ; NEA) は、2009年1月に『盛んになる読書』(Reading on the Rise) という報告書<sup>(1)</sup>を公表した。これは、5～10年おきに実施されている、米国の成人の文学作品の読書に関する調査の報告書で、2008年の調査では、1982年の調査開始以来低下を続けていた、文学作品を読む成人の比率が上昇に転じたことが報告された (E885 参照)。その前の2002年の調査では、比率が初めて50%を下回り、その報告書『危機にある読書』(Reading at Risk)<sup>(2)</sup>では、タイトルが示すように、読書活動の衰退とそこから起こりうる社会への悪影響への危機感が示されていた (E224 参照)。状況が好転した要因の一つは、官民での様々な読書推進・リテラシー向上のための活動<sup>(3)</sup>であると思われる。本稿では、その代表的な例として、NEAが中心となり全米規模で実施している読書推進活動“Big Read”について紹介する<sup>(4)</sup>。

#### 1. Big Read 開始の経緯とその概要

Big Read は、博物館・図書館サービス機構 (Institute of Museum and Library Services ; IMLS) 及び芸術支援団体 Arts Midwest との協力のもと NEA が

2006年から実施しているもので、1つの文学作品を中心とした地域全体での読書推進活動に対し、助成金やその他の活動支援を行うというプログラムである。文学作品に限定しているのは、想像力や他者への共感能力といった、文学作品がもたらす力が重視されているためである。

開始の契機となったのは、2004年に出された前述の『危機にある読書』であった。NEAはまず、米国各地で行われていた“One Book, One Community”プログラム<sup>(5)</sup>等の読書推進活動の成功点と課題について調査した上で、2006年に10地域を対象にBig Read プログラムを試験的に開始した。翌2007年から対象地域を100以上に拡大して本格的に実施し、2009年6月に終了した第5期までの累計で、全50州の500以上の地域でBig Read が開催され、各地域でのイベントに200万人以上が参加している。2009年9月から2010年6月までの第6期は、過去最多となる約270の地域で実施されている。

各地域でBig Read を開催するためには、NEAに申請をして審査に通らなければならない。主催者として申請できるのは、図書館等の公共機関や非営利団体等で、図書館以外の機関・団体が申請する場合には、図書館をパートナーとすることが求められる。申請にあたっては、コミュニティ全体を対象とした約1か月間の活動計画を提出しなければならない。助成金は2,500ドルから2万ドル(約23万円から約180万円)の範囲となっているが、主催者側でも助成金と同額の資金を用意しなければならない。第6期の助成金の総額はおおよそ370万ドル(約3億4千万円)である。

対象となる作品<sup>(6)</sup>は、図書館員・作家ら22人で構成される委員会の推薦に基づき決定される。米国議会図書館のビルントン (James H. Billington) 館長も委員会のメンバーである。作品は米国文学が中心であるが、19世紀から21世紀まで、幅広い年代の作品が選択されている。第6期では28作品と3人の詩人の詩が対象となっており、『トム・ソーヤーの冒険』『グレート・ギャツビー』『マルタの鷹』『怒りの葡萄』『華氏451度』『ゲド戦記』『ジョイ・ラック・クラブ』等の作品が含まれている。各地の主催者は、これらの作品の中から1つを選ぶことになる。

#### 2. 各地域での実施にあたって

コミュニティ全体に活動を行き渡らせるためには、図書館、学校、大学、芸術団体、地方自治体、マスメディア、出版社、書店等の、官民の各機関とのパートナーシップが必要となる。各地域の主催者は、NEAによる事前のオリエンテーションで、実務的な